

靴の歴史散歩 ⑥7

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

古書用語に「希^き観^{こう}本」というのがある。めったに市場に出てくることがない、貴重な本という意味だが、靴産業資料にあって、そんな一冊に該当するのが、西村記念室所蔵の『製靴図集』 非売品 72頁・東京靴工同盟会蔵版・明治34年発行（21.7cm x 15cm）である。（写真参照）

ご覧の通り、表紙はかなり痛んでいて、題字の半分しか読めないが、中身は落丁もなく、良い状態なのが幸いである。

表紙の裏に「文京区根津宮永町七 佐々木靴店 所有」と書かれている。文京区は昭和22年に23区制によって、小石川区と本郷区が統合されて誕生した区名である。

したがって、この文字は、戦後に書き込まれたものということになる。あるいは、寄贈するに当って書かれたものかも知れないが、その確証はない。

この佐々木靴店を、より識るためには、東靴協会の会員名簿に当たるのが一番と思い、協会の井上事務局長に調査のご協力をお願いした。

お陰で昭和27年の名簿から、佐々木靴店・佐々木千江吉氏の名を、尋ね当てることができた。

トントン拍子に事が運ぶと嬉しいもので、今度はその名前を手掛かりに、東靴協会の前身であった、東京靴同業組合（1909年 1943年）にも、同じ名前が出てこないかと、追跡調査を試みてみた。その結果、昭和6年の役員一覧に「第十一部 代議員 佐々木千江吉」と書かれた頁を確認することができた。開業の年は不明だが、かなりの

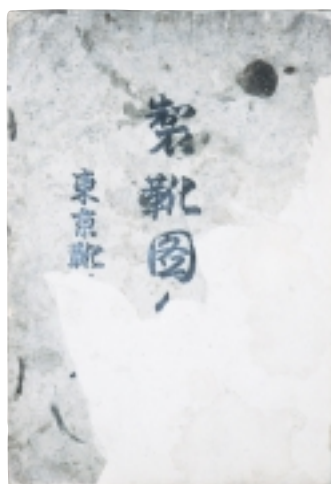
老舗であったことと、古い資料を愛蔵し得た業歴が理解できた。

さて、製靴図集の内容を紹介する前に、発行元である東京靴工同盟会とは、一体どんな団体だったのか、そんなところからこの稿を進めていきたい。

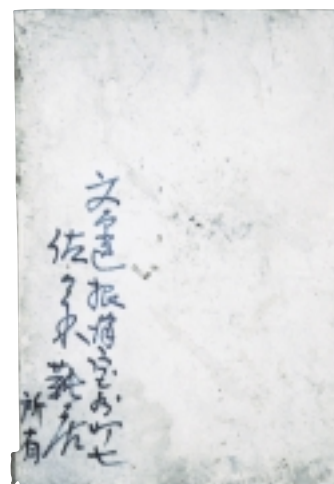
靴工同盟会は、西村勝三と旧従業員を結ぶ親睦団体「伊勢勝靴工旧友会」明治22年（1889年）が、そもそもの母体であった。その後、親睦に加え、技術研究も図られるようになって、他社からの会員も増え拡大していった、というのが経緯である。

明治32年（1899年）には、「東京靴工倶楽部」と改称。日本で最初の製靴教本『製靴図集』を出版し、会員に頒布した。

その2年後、これが靴工の教典として珍重されたのか、今度は「東京靴工同盟会」という名で、再版された。西村記念室の製靴図集は、まさにこの再版の一冊ということになる。（この項続く）



製靴図集の表紙



表紙裏の所有者書き込み